

第三百三十九回 青葉会

平成二十六年六月二十六日(木) 午後六時〜九時 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 後藤保明 小西弘子 中野一灯

星田啓子(新人) 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 小川恭延 小早健介 朱牟田惠洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 福島正明

古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄

〈紙上選句〉 赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 村田くに子

山崎青史 山本三恵

《選者吟》

荒梅雨や参道真中の溶岩弾

万里子 (堅・灯・亜)

梅雨籠りパウロの旅を辿り誦み

全 (五・正・く)

羅の若僧(にやくそう)が撞く午の鐘 (深大寺)

全 (啓・く)

雨傘を日傘に狐のお嫁入り

全 (弘・隆)

甘酒や漱石も子規も甘党で

全 (堅)

《互選句》

七点 ☆黒南風(くろはえ)や一揆煽りし鐘を撞く

一灯 (万・紀・五・正・啓・亜・三)

(☆: 季語と中七がびつたり) (礪波の寺) (正↓下五「鐘の音」でも可)

千切りのキヤベツのやうな朝が好き

正明 (猛・孤・弘・敏・啓・亜・青)

(一番話題に。作者に皆さん驚き) (青: 比喩が新鮮)

☆緑陰で世間話か石羅漢

忠彦 (万・紀・灯・允)

(☆・紀: 「で」↓「に」)

山好きの句友偲びつ初登山

全 (堅・敏・灯・く)

☆書庫の匂ひ常よりは濃く梅雨に入る

惠洲 (万・允・正・啓)

☆松脂を入れて懐かししやぼん玉

啓子 (万・孤・敏・天)

我が庭の女王となりしバラ一輪

そらお (弘・龍・青)

「お祭り」の仁左衛門

涼しげに愛嬌ふりまく舞台かな

紀久男 (猛・く・天)

箱庭の釣師五センチ上流へ

弘子 (紀・灯・青)

(青: 減多にお目にかかれな秀句)

サーファーの海滴らせ帰る道

全 (孤・隆・正)

救急車まさか乗るとは五月闇

健介 (猛・忠・保)

夜濯(すすぎ)を済ませ絵ハガキ旅の宿

堂哉 (龍・敏・青)

(青: ややデ・ジャヴユの感ある句)

☆手水場に青蛙出づ鄙の宿

亜也 (万・允・天)

細指でつまむ守宮のひいやりと

全 (紀・灯・天)

予報ではエルニーニョとか夏燕

全 (五・隆・三)

夏草や隣の墓地は無縁なり

盛雄 (紀・灯・允)

「蘭平物狂」の尾上左近

☆手に汗の化粧くずるる初舞台

紀久男 (万・亜)

「名月八幡祭」

殺し場の夕立上がるや月濡れて

全 (亜・三)

ずれたるを明け方気づく夏布団

猛 (保・弘)

門前に十葉光る時の鐘

忠彦 (五・三)

鉄線の少し萎るる昼茶室

五郎太 (敏・啓)

青田風東北弁のお内儀(かみ)たち

全 (隆・く)

心太身体の中を風が吹く

保明 (五・允)

何故急ぐ道が熱いか黒毛虫

全 (青・天)

(青：安倍政権は正に・・・)

冷麦に季節を頂き有難や  
十葉や足先覗くマリア像  
三階の窓開く鰻屋蔵の町  
完成の域や老鶯今朝の歌  
☆家苞(いさご)はペットボトルに汲む清水  
(☆：下五↓清水汲む)

☆風鈴を愛つと異国の友の文  
仏彫る鈍色(にびいろ)の鑿(のこ)青葉光  
ゆたか (万・龍)  
一灯 (孤・三)

(孤：「鈍色」と「光」が響き合いすぎるので「青葉光」↓「青葉風」)  
☆梅雨晴や佐渡見はるかす白燈台  
全 (万・保)  
昇 (万・孤)  
☆蕭条(しょうじょう)として竹林の五月雨る  
啓子 (紀・弘)

汗かけば取れちやうかなあと眉を掃く  
(孤：下五↓「眉を刷く」)  
山梔子(くちなし)も激しき雨に花無惨  
全 (忠・保)  
芝の先露に逆さの小宇宙  
全 (堅・敏)  
梅雨に死すフランス生れの日本人  
天牛 (忠・正)

一点  
吐き出せば濡れて光れり枇杷の種  
そらお (猛)  
小曾根真と読売交響楽団

汗見せず満場沸かすジャズピアノ  
紀久男 (天)  
梅雨の間の疲れを癒す円き月  
猛 (五)  
外人の見入る御苑の花菖蒲  
全 (亜)

喜多院の鶯張り踏み青葉風  
忠彦 (隆)  
看護師の笑顔満つ院梅雨晴間  
恭延 (隆)  
連日の通院癒やし風薫る  
全 (紀)  
窓開けしアパルトマンに夏の風  
五郎太 (弘)  
(ラウル・デュフィ：画家)

六月限(げん)旅の行く先決め兼ねて  
全 (龍)  
日陰のみ伝ひて歩く我悔し  
保明 (忠)  
梅雨の夜の人形の顔ふと動く  
恵洲 (允)  
杯重ね更に重ねて白夜かな  
堂哉 (万)

☆騎馬警官歩み夏々(カッカッ)風薫る(ロンドン)  
全 (く)  
青嵐僧兵踏破の岩根踏む  
一灯 (堅)  
戯れる綾取りの糸ハンモック  
正明 (隆)  
御仏の裳(もすき)のそよぐかに若葉風  
昇 (紀)

(孤：中九になつている。戦ぐように見えたのだから、嘘でも断定した方がよい↓「裳裾の戦ぐ」)  
梅雨晴の夕べ紫陽花萎れけり  
規雄 (保)  
様々な色して紫陽花雨の中  
全 (猛)  
穴子釣り船頭手練で捌きけり  
亜也 (孤)  
(孤↓船頭の手練の手捌き穴子釣り)

青大将陣振れをして捕えけり  
全 (紀)  
夏嵐ポキポキ折れしキウイの蔓  
天牛 (啓)  
座る児もかくれてしもう大西瓜  
全 (保)  
魚屋のおかみさんの死えごの花  
全 (紀)

●次回青葉会

七月二十四日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

八月二十八日(木)

以上 文責 紀久男

平成二十六年六月句会報

一 今回は万里子先生以下11名出席。投句は10名。  
先生寄贈の豆富ドーナツ、ミニチヨコ。弘子さんからの薄皮饅頭と金鰐（三全）、啓子さんの「菊姫」、亜也さんの「大信州」、小生の「久保田千寿」といつもの甘辛一級品を賞味しつつ開会。  
いつもの猛さんの披露で快調に飛ばし、御覧のように一灯さん、正明さん、忠彦さんが高得点でした。回覧は恵洲さんそらおさんの三吟歌仙「春灯の巻」と「萬緑」の合評（眞希子さん弘子さんの作品）。孤舟さんからの句評：「全体に中8の句が多かったです。言葉を置き換えてでも中七にした方がよいと思います」

二 関係者近詠

ひもすがら照り合ふ緋躑躅紅躑躅	万里子	日本晴新茶の香四方（よも）に満つ	規雄
次々とジヨガー駆込む八重桜	全	—「NHK俳句」七月号 宇多喜代子選	
回り道寄り道花の呼ぶ丘も	眞希子	早春のひかりに向かふ駿馬かな	孤舟
つくしんぼ先の命を読めぬ幸	全	天焦がす野火の咆哮草千里	全
青饅や明日への伝言酔ふ前に	全	夜桜の散るに逡巡なかりけり	全
文鳥の春眠卵を抱いてより	弘子	三毛猫は駆込み寺へ臈月	全
紫木蓮身振り大きな立話	全	波穏やかな遅き日の鳩の湖	全
五匹目の亀よち上る暮春かな	全	—「爽樹」七月号	
有終の務め果たせり八重桜	恭延	空ひくく紫陽花の咲き揃ひけり	允章
紫木蓮漸く崩れ見せ初むる	全	未央柳濡れて耀ふ金の蕊	全
人氣（ひとけ）なき被曝地桜満開に	紀久男	花柘榴きらきら通る昼の雨	全
桃花を摘んで散らせし若夫婦	全	掻き混ざるオンザロックの音涼し	全
舳先にて捌ける烏賊の美味さかな	忠彦	父の日と気づかぬままに更けにけり	青史
—「萬緑」七月号—		羅が身を躲したる砂被り	全
		薄衣ただそれだけのことなれど	全

三 恵洲さんから「怖い俳句」（倉坂鬼一郎著。幻冬舎新書）面白いと連絡あり。

恵洲さんの抄出三句紹介します。

- ・ 狐火や鬮體に雨のたまる夜に 与謝蕪村
- ・ 稲妻に道きく女はだしかな 泉鏡花
- ・ 月天心まだ首だけが見つからず 眞鍋呉夫

四 万里子先生から「萬緑」創刊号（昭和21年10月）の復刻版（平成3年10月）を拝借しました。草田男は敗戦後の虚脱状態から「文化國家建設」を目指し。俳句分野で伝統俳句の「藝」と新興俳句の「文學」の渾融を説いて、その実践活動の場として創刊に至った熱い思いを述べております。高濱虚子や齋藤茂吉、高村光太郎、室生犀星らの祝辞と作品含め、わづか32頁の小冊子です。小生好みの句を抄出してみました。

鶏鳴の多さよ夏の旅一歩	草田男	籠に満ちて尚一つ取る茄子かな	虚子
灼ける往還首かたむけて望み佇つ	全	涼しさの肌到手を置き夜の秋	全
幼子の跣足踏む音土に聞く	全	昏昏と月へ化しゆくとき射たる	岡田海市
夏蝶白し憤りの日尿（しと）にごる	全	七夕や妻と會ひ得てより五十日（いそむ）	香西照雄
夕日あかあか浴衣に身透き日本人	全	ひねもす閉ざせし口に甘かり冷豆腐	川合絹漱
		呟きが煙草火となる蚊帳の人	全

—回覧希望される方は小生にご連絡下さい。句会終了後、先生から「萬緑」俳句手帳を配られました。有難うございました。

平成二十六年七月十一日

紀久男記